

## 令和8年度第1回秋田県文化芸術推進協議会 議事要旨

日 時：令和8年7月15日（水）13：30～15：15

会 場：秋田県庁第二庁舎 災害医療対策室

出席者：委員 富橋信孝（会長）、高橋正、日景省蔵、若林朋子（議長）、藤本悠里子、  
後藤仁、奥山昇、佐藤雅彦（敬称略）

|     |            |                     |
|-----|------------|---------------------|
| 事務局 | 県文化振興課     | 永須課長、佐藤チームリーダー、佐藤主査 |
|     | 県観光戦略課     | 澤田石副主幹（兼）サブリーダー     |
|     | 県教育庁生涯学習課  | 湯野澤学芸主事（兼）社会教育主事    |
|     | 県教育庁文化財保護室 | 伊藤チームリーダー           |

議 事：（１）令和7年度の取組の評価及び令和8年度の評価方法について  
（２）令和8年度の施策・事業について  
（３）文化芸術等に関するアンケート調査について  
（４）その他

### <議事内容>

#### ◆ 会長及び議長の選出

秋田県文化芸術推進協議会設置要綱第3条第2項に基づき、委員の互選により富橋信孝委員を会長として選出した。

また、委員の互選により、若林朋子氏を議長として選出した。

#### （１） 令和7年度の取組の評価及び令和8年度の評価方法について

##### 【若林議長】

議事に入る前に、昨年度策定した「第4期秋田文化振興ビジョン」について、事務局から簡単な説明をお願いします。

##### 【事務局】

—参考資料により説明—

##### 【若林議長】

本協議会は、ビジョンに基づく活動の評価や次のビジョンの策定に関わる重要な役割を担っている。新メンバーも加わったため、昨年度策定に関わった委員に当時の議論のポイントや感想を伺いたい。まずは高橋委員、いかがか。

##### 【高橋委員】

策定にあたっては、「文化芸術活動の底辺を広げていくために何が必要か」をできる限りビジョンに盛り込んでほしいと意見した。その内容も踏まえて、細かく反映してもらった記憶がある。今後は具体的にどこを強化していくべきかを本協議会で議論していきたい。

##### 【若林議長】

底辺をどう広げるか、そして実際にどう広がったかを見極めていくことは非常に大事だ。日景委員はいかがか。

【日景委員】

高校生の合同による演劇活動などが行われているが、より活動しやすい環境や内容の検討を求めた。また、公共文化施設に関わっている立場から、文化会館やスポーツ施設、公民館といった公共施設同士の連携について、県が中心となって推進する仕組みをビジョンに入れてほしいと発言した。

【若林議長】

高校生や若い人たちが文化に親しめる環境づくりは極めて重要である。その辺りも、どう実現できるか考えながら評価できればと思うが、富橋委員はいかがか。

【富橋会長】

秋田県には文化振興財団がないため、全国的に見ると難しい面もあるが、そのメリットや課題を踏まえた上で、将来的には「アーツカウンシルあきた」のような組織を立ち上げたいという思いがある。芸術の主演として舞台に立つ人だけでなく、運営や資金面を支える裏方・アートマネジメントの部分を担当する人々が働く場所をどうつくるか。そうした課題もしっかりと話し合える場が、この協議会であると感じた。

【若林議長】

現在、全国に約 20 団体のアーツカウンシルがあり、地域での助成金運営や相談窓口、情報提供などの面で国以上に活躍している。仮に秋田で設立する場合に、どのような人が参加し、どう雇用を生み出せるか、ここでの議論から発展させていくことができるかもしれない。

それでは、議事の 1 に入るので、事務局に説明をお願いします。

【事務局】

資料 1-1 をご覧願いたい。「あきた文化振興ビジョン」の進行管理については、PDCA サイクルのマネジメント手法により、各施策・事業・取組の達成状況を検証・評価し、その結果を次年度以降の施策等に反映させることとしている。

評価の方法は、数値による指標の達成状況を見る「定量的評価」と、個別事業の現場調査に基づいて質的評価を行う「定性的評価」の 2 本立てとしており、両評価の結果は、毎年度、当協議会に報告し、検証を受けることとしている。

このうち、「定量的評価」の各指標の達成率及び判定は御覧のとおりで、7つの指標のうち 5つは目標を上回るかそれに近い水準の達成率となっているが、②の「文化芸術活動を行っている人の割合」と④の「次世代を担う後継者や若手アーティストの育成と活動支援」は目標を大きく下回り、e 判定となった。その影響で、下に記載している全体の「定量的評価結果」は、昨年度の B から下がり D となった。

今後の対応方針として、②に関しては、文化団体が行う活動への補助金交付などの支援や、優れた作品や活動に対する顕彰、「あきた文化交流発信センター」の運営による発表・交流の場の創出等を通じて、幅広い世代がそれぞれの希望に応じた活動に取り組みやすい環境づくりを進める。また、④に関しては、今年度からの新たな事業として、若手アーティスト等が地域の文化や人々と関わりながら作品制作等を行う場を提供するなど、若手アーティストの活動を支える取組を行うこととしている。

次に、資料 1-2 と資料 1-3 をご覧願いたい。「定性的評価」については、若い世代の視点を取り入れる観点から、資料 1-3 のとおり、大学生からなる評価チームが実施状況の現場

調査を行い、評価対象事業の質的水準を「有効性」「運営」「工夫」等の観点から、各評価項目について５段階で評価し、総合判定を出している。この評価方法は、令和７年度から導入しており、行政に関する特段の専門的知見を持たなくても評価することが可能なイベント型の事業を選定している。

令和７年度は、資料１－２に記載の５つの事業を対象に、秋田大学の「地域連携ゼミ」を履修する学生等に評価の実施をお願いした。総合評価はいずれもＡまたはＢと、概ね良い結果となっているが、それぞれ、課題や改善が必要な点が挙げられたことから、記載のとおり、今年度の事業実施に反映する。

以上が、令和７年度の取組の評価についてである。

続いて、令和８年度の評価方法についてである。資料１－３を御覧願いたい。第４期ビジョンにおいても、引き続き、①「定量的評価」と②「定性的評価」の２本立てで実施するが、①「定量的評価」については、県総合計画における施策の評価と整合を図るため、その評価制度を準用し、記載の判定基準によって、ビジョンに定めた成果指標の達成状況を評価したい。②「定性的評価」については、資料の１－４もあわせて御覧いただきたい。

評価項目については、令和７年度と同様に資料１－３に記載のとおりとし、令和８年度の対象事業に関しては、資料１－４に記載の５つの事業にしたいと考えている。選定にあたっては、今年度も秋田大学地域連携ゼミの学生による評価を実施するため、同ゼミの活動可能期間内に開催されるイベント型の事業とした。

【若林議長】

ただいまの説明について意見や質問を求める。まずは令和７年度の取り組み評価について、定量的・定性的のどちらからでも結構だ。評価結果がＢからＤに下がった点などを含め、いかがだろうか。

【佐藤委員】

定量的評価の４つめ「若手アーティストの育成と活動支援」がｅ判定という点に少し違和感を持っている。文化による地域の元気創出事業費補助金などで、若い人に少額ながらしっかり支援を行っている実績があるだろう。また、アーツアーツポートプログラムの終了は昨年度の時点で判明していて、最初からこのような評価になることは予見できたと思う。事務局としてはどのように捉えているか。

【事務局】

県補助金による若手向けの支援１１件はこちらの実績件数に含まれている。６年度まで実施していたアーツアーツサポートプログラムが終了し、７年度はビジョン策定の年であったため、新たな若手アーティスト向け事業立ち上げへの移行期にあたり、一時的に若手向けの事業ボリュームが薄くなってしまったことがｅ判定の要因だ。今年度からは新たな取り組みをしっかりとスタートさせており、補助金を通じた主体的な活動への支援も継続していく。

【佐藤委員】

秋田県の一番の社会課題は人口減少、特に若者の減少であり、労働力不足などはあらゆる施策の根底にある重要な部分であるため、若手アーティストの支援については効果的な施策を打ち出していきたい。

【事務局】

県としても、若者の定着や活動継続については特に重要なポイントとして捉えている。

【若林議長】

「次世代を担う後継者」や「若手アーティスト」とは誰を指すのかを改めて整理する必要がある。高校生なのか、プロの職業アーティストなのか、あるいは伝統工芸や郷土芸能の後継者なのか。その辺りを明確にすることで現状の施策の成果や課題が見えてくることもあるので、今後の検討材料にしていければと思う。

【高橋委員】

資料 1-1 の「②文化芸術活動を行っている人の割合」が e 判定になっている点に関して、ここでいう「文化芸術活動を行っている人」とは、あきた芸術劇場ミルハスなどの施設で発表している人を指すのか、あるいは地元のお祭りで太鼓を叩いているような人も含まれるのか。極論を言えば、おじいさんやおばあさんが孫に昔話を読み聞かせるような営みは含まれるのか。調査の仕方や定義によっては数値がもっと高くなるのではないかと感じたので、ご検討いただきたい。

【事務局】

この指標は「県民意識調査」の設問に基づいており、「ここ 1 年間に芸術作品の創作、文化イベントへの出演・参加、ボランティア活動などを行いましたか」という問いに対し、選択肢を「①芸術作品の創作・制作・実演・習い事」「②地域の祭りや伝統行事への参加」「③イベント等の開催運営活動」「④その他（自由記述）」および「活動していない」としている。

【高橋委員】

第三者を巻き込む形での活動と、巻き込まないけれども文化を伝えていく活動の 2 種類があると思うので、後者の視点も入っているのかという疑問からお聞きした。今後の検討をお願いする。

【若林議長】

継続調査の場合、経年比較の点で難しいかもしれないが、昔語りのような秋田らしい営みを選択肢に入れることで、秋田ならではの文化芸術活動も浮き彫りにできるかもしれない。回答者の属性などが分かると更にアイデアが出やすいと思うので、今後、共有をお願いする。

【後藤委員】

同じく②と④の指標が気になっている。②の目標数値が毎年上がっているが、人口が減少している中で、文化芸術活動に関わっている人の割合をさらに増やさなければならないということになる。「40%の人が文化活動を行っている」という目標は、かなり高く設定されていると感じるが、どのような経緯で設定されたのだろうか。

【事務局】

40%という数値は前計画（第 3 期）で設定された令和 7 年度の目標値であるが、コロナ禍前の令和元年度の平均が 27.7%であったため、かなり高めの設定となっていた。そのため、新しくスタートした第 4 期ビジョンでは現状に即して見直しを行い、最終年度（5 年目）の目標値を 30.1%という現実的なラインに下方修正した。

【若林議長】

どこの自治体にも言えるが、計画期間中の目標数値を毎年スライドして上げていくのは厳しい。数字も大切だが、その期間中に具体的に行ったのかを後で振り返ることが重要だ。

【藤本委員】

皆様の言う通り、効果測定や目標設定はあくまでもゴールに達するための手段であり、「文化に触れる人が増える」「若年層が主体的に関わることで地域にオーナーシップやシビックプライドを持つ」といったゴールにどうつながっていくかが本質だと思う。数字に囚われすぎると運営が難しくなることもあるため、福祉や教育など他分野と連携したアプローチも含め、数字の先の展開を合わせて考えていくことが重要ではないだろうか。

【若林議長】

大変重要な指摘だ。来場者数やページビューのような「静かな数字」だけでなく、「新しい社会領域とどれだけつながれたか」といった、そこからより成果を深堀できるような「動きのある数字」を評価指標に組み込んでいくことも検討できればよい。「動的数字」は、単体の数字としては決して多いものではなくても、例えば、他の分野とつながることで相互にどんな影響や効果があったのかを評価でき、次の展開にもつながられる。

【藤本委員】

私は「秋田市文化創造館」の運営を担当しているが、いわゆる「芸術活動」というよりは、介護経験を写真として発表したり、少しずつ溜めてきた作品を展示したりといった、生涯学習のような取り組みをされる方の方が圧倒に多いという肌感覚がある。そうした身近な活動もすくい上げられるような指標や評価方法が適切ではないかを感じる。

【奥山委員】

まもなく7月26日から「全国高等学校総合文化祭」が開催される。これは全県を対象とした非常に大きなイベントであり、一時的であれ芸術文化への関心が大きく高まることが予見される。この期間中にどれだけの人が文化に触れたのか、何らかの方法で数値を把握しておくことは、今後の取組の目安として重要ではないか。また、こうした大型イベントの翌年度は関わった人が一気に減少する傾向もあるため、昨年度から今年度、今年度から来年度にかけての数値の変化を把握できるよう、考えていただきたい。

【事務局】

評価方法に関しては、第4期ビジョンの中で既に決められた全体指標と施策ごとの指標があるが、秋田ならではの指標や動き、今ご指摘のあった「高総文祭」による一時的な盛り上がりなどについても把握し、本協議会で報告できればと考えている。

【若林議長】

参加者アンケートに共通項目を設け、「県内外からどれだけ移動が起きたか」などのマーケティング的な視点を取り入れる工夫もできそうだ。

また、7年度の総合評価に関して、e判定がついた数値があって、総合評価がDになってしまったところは、数値の取り方次第で評価が上がったかもしれないとの意見が出たのが印象的だった。

定性評価については、数字の解釈と、その結果に至るまでにどんなことを行ったのかというエピソードの両輪で捉えていくことで、A～Eの評価がよりリアルになる。大学生が定性評価を行う手法は全国的にも非常に珍しく興味深いが、今後は「大学生評価」を導入する前後での評価結果の違いや、どのような若者らしい意見が出てきているのかを、一度、比較分析を行うとよいだろう。また、若者による評価が大事な一方で、評価される側としては、同じように

切磋琢磨している文化の専門家の意見など、多様な視点からの評価も求めている可能性がある。若者による評価の重要性を前提としつつも、それが県の最終的な定性評価として確定してよいのか、より幅広い世代や専門性を取り入れてもよいのではないかな。

続いて、令和８年度の評価方法案と対象事業について意見を求める。

【富橋会長】

対象事業のうち「若手アーティスト等活動支援事業」について、アート分野と映像分野を評価するとのことだが、これは学生が作品そのものを評価するのか、あるいはそのプロセスを含めて評価するのか。他の事業に比べて評価が少し難しいように感じる。

【事務局】

学生のゼミの活動期間の都合上、今回は期間内に実施される「ワークショップ」等への参加を通じた評価を想定している。資料１－３の評価項目にある「事業の目的や狙いに沿っていたか」「興味関心を惹かれる内容だったか」といった有効性や、運営の工夫という視点に沿って、グループでチェックしてもらう予定であり、学生の率直な意見や数値以外のエピソードも拾い上げたい。アート分野は、にかほ市で開催するため、学生の日程を調整して現地へ案内する形で進める予定だ。

【富橋会長】

公演のような成果物を評価するのとは異なり難しい面もあると思うが、参加する学生にとっても興味深い体験・評価になるのではないかと期待している。

【高橋委員】

資料１－４の定性的評価の中に「秋田民謡に馴染みのない県民や観光客に向けたアウトリーチを実施する」とあるが、具体的にどのような内容を予定しているか。

【事務局】

８月８日に文化交流発信センターにおいて秋田県民謡協会の方々による演奏披露を予定している。

【高橋委員】

秋田の民謡は農作業や米の収穫といった地域の生活背景から生まれてきたものだ。そうした背景を知って聴くのと知らないで聴くのとでは興味の広がり方が異なるので、底辺を広げるという意味でも、民謡協会の先生方からそうした解説やアプローチを含めてご紹介いただけると面白いのではないかと感じた。また、定性評価の項目が多くある中で、デジタル技術の活用など、特定の項目が実施されていないために全体の評価が下がってしまうようなことがないよう、また、「文化芸術の裾野を広げる」という本来の目的が達成されているかどうかを最も重要であるということを学生たちが理解したうえで評価されるよう、配慮していただきたい。

【若林議長】

たとえば「あなたが人に推したいポイントは何か」といった聞き方で自由記述してもらって、通り一遍の答えではなく熱量のある意見が返ってくるかもしれない。

【後藤委員】

令和７年度と８年度で継続して評価対象となっている事業がある場合、昨年度の評価内容や改善点は、事業の実施担当者にきちんと共有されているのだろうか。

【事務局】

定性評価の対象事業はすべて当課の事業であり、それぞれの担当者に評価結果を共有し、次年度の改善につなげるようにしている。

【後藤委員】

せっかく良い点や問題点を評価してもらっているのだから、次の年度で改善されたり更にプラスに向かっていくよう、しっかり活用してもらいたい。

【若林議長】

評価でもらった意見を県民に公開していくことも大切だ。

## (2) 令和8年度の施策・事業について

【若林議長】

続いて、議題2の令和8年度の施策・事業について、事務局から説明をお願いします。

【事務局】

第4期ビジョンでは、基本目標である「県民が文化芸術を存分に楽しみ、彩り豊かな秋田の魅力を紡ぎ出す」の実現に向けて、3つの施策を展開することとし、取組の方向性、主な内容を定めている。

施策1「県民が文化芸術に親しむ機会の充実」については、「文化芸術に親しめる機会の創出」を図る取組として、「文化による地域の元気創出事業費補助金」により、文化団体等が行う、広く県民に公開される音楽や演劇等の文化事業、文化交流のための事業等に対し助成を行い、全県域で文化芸術に親しむ環境づくりを行う。裏面の「多様な人々が文化芸術に取り組むことができる環境づくり」の取組としては、「あきた Museum 機能強化事業」により、県民ニーズに応える特別展を開催するほか、デジタル技術の活用等による施設の機能強化を図る。

3ページ目の施策2「文化芸術活動による秋田の魅力を磨き上げ」については、「発表し競い高めあう場の提供」を図る取組として、「文化の承継・創造推進事業」により、美術、音楽、文芸など多様な分野の公募型事業を実施し、創作・表現活動を行う方々の意欲や技量の向上を促進する。また、「秋田ならではの文化資源を活用した誘客促進」の取組として、「秋田の魅力発見・発信事業」により、PR会社のネットワークを活用した首都圏のテレビ・雑誌等のメディアへの戦略的なアプローチにより、文化資源を含む観光コンテンツ等の露出を拡大し、認知度向上と来訪意欲の喚起を図る。

【若林議長】

今年度の取り組みの進め方や、来年度以降のあるべき方向性について意見を求める。

【奥山委員】

1ページ目の「アウトリーチ活動」についてだ。昨年度から対象となる団体・地域について相談を重ね、今年度は湯沢地区の中学校を対象に実施する運びとなったが、現地は非常に前向きで、楽しみにしているという声が届いている。昨年度実施した秋田市の中学校での事例も、他地域から非常に羨ましがられていた。ぜひ秋田県全体を幅広く対象として継続していただきたい。

また、現在は中学生や高校生、一般が主な対象となっているが、吹奏楽の世界では全国的に小学生をいかに巻き込んでいくかが課題となっている。小学生の児童が活動を始めると、親や兄弟、祖父母まで家族全体が芸術文化活動に巻き込まれていくという高い波及効果が期待でき

る。少子化が進む本県だからこそ、将来の後継者育成や文化の継承のためにも、今後は対象に小学生も盛り込み、手厚いアウトリーチの提供を進めていただきたい。

【日景委員】

対象事業の開催会場が秋田市中心部に偏っている印象がある。施設の都合もあるかと思うが、県北や県南にもバランスよく会場を設定するなど、全県的に文化芸術活動への意識を盛り上げていくための工夫をお願いしたい。

また、「文化行政担当者研修会」について、市町村の文化行政担当者が対象のようだが、指定管理者も対象に含めた研修にしていきたい。県の公立文化施設協議会の加盟施設の半数は指定管理者であり、専門的に取り組んでいるため、市町村直営に比べて意識や取り組み方も進んでおり、全体的な底上げにつながるのではないかと。

アウトリーチに関しては、大館や横手、湯沢でも一般財団法人地域創造の事業などを活用して実施しているが、やはり子供の頃から本物に触れる機会が必要であるため、更なる充実を望む。今月末からの「全国高等学校総合文化祭」では、大館市も百人一首と演劇の会場となっており、文化芸術活動への地域の意識が高まっている。こうした事業が教育や観光物産にどう波及しているのか意識しながら、多様な主体が連携してビジョンを推進していくべきではないか。

【藤本委員】

新規層の獲得にはどの文化施設・団体も苦心している。現在、美術館や舞台芸術に親しんでいる層の高齢化が進む中、小・中・高生といった次の世代をどう巻き込んでいくかが重要だが、財源や中間支援人材が不足しており、1つの施設だけで対応するのは体制的に厳しいのが現状だ。

私が所属する秋田市文化創造館は、駅前エリアに文化施設が集合しているため、合同での防災訓練や多言語対応の職員研修など、地域連携が比較的行いやすい環境にある。今後は公共施設だけでなく、ココラボトリーさんのように民間でありながら公益性の高い拠点も含めて、中間支援層のネットワークを形成するとともに、アトリオンや近代美術館などが持つアウトリーチのノウハウを相互に共有し、連携し合って新規層を巻き込んでいくような仕組みが今後の取組の中で実現すると良いのではないかと感じる。

【後藤委員】

私のように個人でスペースを運営している立場や周りの作家の視点から見ると、行政が実施する企画・事業は自分たちにとって魅力・メリットがあるのかという情報があまり届いておらず、外側から見ると少し距離のある試みに見えてしまっている。内側の連携のレベルアップはもちろん必要であるが、「外側からどう見え、外側の人とどう関わっていくか」という視点も、それぞれの事業担当者が意識していく必要があると感じる。

【富橋会長】

駅前エリアの芸術文化ゾーンの連携について、何かフックとなる共通のイベントができないかと考えていた。県立美術館に聞いたところでは、来年は藤田嗣治の壁画「秋田の行事」完成から節目のメモリアルイヤーにあたるそうだ。旧県立美術館（現・文化創造館）にあった壁画が新しい県立美術館に移動したという経緯もあるので、この壁画をテーマに、県立美術館では美術展示、アトリオンでは関連する音楽催事、ミルハスでは演劇やダンス、あるいはココラボ

ラトリーさんなども巻き込みながら、地域の文化施設が共同で知恵を絞り、予算を獲得して動くような大きなイベントができれば、課題の共有や分野を超えた展開につながるのではないかと感じている。

【高橋委員】

資料 5 ページの「民俗文化財継承支援事業」について、発表機会の創出や用具の修理補助などに地道にしっかり取り組まれている素晴らしいが、民俗芸能の継承において最も重要なのは「それを行う地域のコミュニティが活性化していること」であり、それが前提となる。教育委員会としての支援だけでなく、地域づくりや地域活性化を担う知事部局担当部署とも連携し、コミュニティの土台を強くした上で補助事業の活用を進める形にすると、より効果的になるのではないかなと思う。

【伊藤チームリーダー】

高橋委員のご指摘の通り、地域コミュニティが一番大事であるが、現在は地域に子供がいなくなり成り立たないという現状もある。教育委員会としては、まずは小学生やそれ以下の子供たちに地域にこうした文化があることを知ってもらうことや、同じ学校内で実は 1 年生から伝統芸能を頑張っている子がいるといった事例を周囲に紹介し、光を当てる地道な取り組みを続けていきたいと考えている。

【佐藤委員】

事業の担当課だけでなく、観光関係の部署や秋田観光コンベンション協会、少子化対策の担当部署など、県庁内の部局間ディスカッションを継続的に行い、効果的な連携を進めていきたい。質問だが、4 ページの「若手アーティスト等活動支援事業」における「地域の文化や人と関わりながら作品を発表し、その後の継続的な活動を支援」というのは具体的にどのような内容を想定しているか。

【事務局】

にかほ市において概ね 40 歳以下のアート・デザイン分野の若手を募り、現地に滞在してアドバイザーの伴走支援を受けながら地域資源を活用した創作活動を行ってもらうとともに、ワークショップ等で地域住民と関わっていただく。このプロセスを通じて秋田で活動を続けたいと思ってもらえるような関係性や活動基盤を築いてもらうことを想定している。継続的な支援体制については、来年度以降の事業で構築していきたいと考えている。

【佐藤委員】

令和 7 年度の評価で e 評価になっていた若手支援の課題を具体的に事業に落とし込んでいるのは素晴らしいことだと思う。

【若林議長】

皆様から「誰と関わるか」「連携・協働」というキーワードが多く出された。資料の事業一覧の中に、担当課だけでなく中間支援組織や民間団体、異分野の部署など、想定される連携先を記載する覧を設けると、後々の評価の際にも振り返りやすくなると思う。また、内容の部分に、いつ、どこで、どのような規模でといった 5W1H や予算額などの具体的な数値が見えると、委員にも事業の規模感が把握しやすくなると思うので、検討されたい。

### (3) 文化芸術等に関するアンケート調査について

【若林議長】

続いて、議題 3 の文化芸術等に関するアンケート調査について説明をお願いします。

【事務局】

資料 3 をご覧いただきたい。これまでビジョンの全体指標は「県民意識調査」の設問を通じて把握してきたが、令和 9 年度以降、同調査の設問削減や手法の見直しが検討されており、今後も継続して利用できるか不透明な状況となっている。そのため、今年度は試行的に文化芸術等をテーマとした Google フォームによる単独のアンケートを実施し、手法の有効性を検証することとした。なお、同様の事情により「読書活動推進基本計画」の指標調査も合わせて実施する。

調査内容は別紙の通り必要最低限の項目に絞っており、Q2・Q3 が全体指標に該当する。5,000 人対象の層化抽出法・郵送調査による従来の県民意識調査とは設計が大きく異なるが、予算がないため、デジタルフォームを活用したこの手法で試行する。

【若林議長】

反映できる意見があれば伺いたい。選択肢などについて、いかがだろうか。

【日景委員】

アンケート項目に「読書活動について」が入っているのはどういう経緯だろうか。

【事務局】

読書計画についても同様に県民意識調査の縮小に伴う指標把握の課題があるため、別々に調査をかけるよりも効率的であると判断し、今回一本化して実施するものだ。この場では、資料前半の文化芸術に関する項目についてご意見をいただきたい。

【藤本委員】

Q3 の選択肢について、一般県民レベルでは「文化」として認識されていないような、生涯学習のような「文化未満の活動」を包括できる項目があると、裾野が広がるのではないかと感じる。また、単に「参加した・鑑賞した」だけでなく、「それによって行動を起こしたい気持ちになったか」「新しい視点や価値観との出会いに繋がったか」といった県民の内面の「変化」を測る項目が 1 つでもあると、より深い評価に繋がると考える。

さらに、「現在ここにいない人（文化活動に参加していない人）」はなぜ来ないのか、どういう理由や障壁があるのかという点が、新規層を獲得するうえで一番知りたい部分だ。Google フォームのリンクを道の駅や施設に貼る手法では、そこにアクセスできる「すでに来ている人」の回答に偏りがちであるため、ジレンマではあるが、アンケートの投げかけ方や方法を工夫できれば良い。

【若林議長】

選択肢は 15 個程度であれば許容範囲だと思われるので増やして、伝統行事でのお囃子の稽古や昔語りといった秋田らしい文化芸術活動への関わり方をすくい上げられると良い。また、評価は「変化の可視化」とも言われるので、文化芸術活動に参加したことで何か新しい視点や変化があったかなど、自由記述でも良いので書いてもらえるようにするのもありではないか。

【奥山委員】

Q3 の問いの文章が「～ボランティア活動などを行いましたか？」となっているが、この聞き方だと回答は「はい」「いいえ」になってしまう。下の選択肢との整合性を持たせるため

に、「どのような活動を行いましたか？」という聞き方に修正し、最後に「活動していない」という選択肢を設けた方がすっきりするのではないだろうか。

【若林議長】

そのような聞き方の方が自然かもしれない。また、アンケートを「こういうことも文化芸術活動に含まれるんだ」というメッセージを伝える広報・政策認知のツールとして活用できると、この機会を前向きに捉えられる。

【佐藤委員】

例えば、自宅で1人、趣味としてクラシックギターを弾いているような人は、この設問設計だとどこに分類されるのだろうか。Q1にいう鑑賞もせず、コンサートにも行かず、他者と関わるボランティアもしていない場合、自ら熱心に創作・活動していても、最終的に「文化芸術活動を行っていない人」に分類されてしまわないだろうか。

【若林議長】

ご指摘のとおり、施設での見聞きだけが文化芸術ではなく、個人の日々の営みとしての活動もしっかりすくい上げられるような言い回しや選択肢の工夫が必要だ。他自治体の事例なども参考にして、事務局でブラッシュアップしていただきたい。委員の皆さんは、この場で思いつかない点があれば後日早めに事務局へ意見を寄せてもらいたい。

#### (4) その他

【若林議長】

最後に、全体を通じて言い残したことや情報提供などがあればお願いする。

【奥山委員】

情報提供だ。5月末に他県のテレビ局から、あきた芸術劇場ミルハスと当連盟へ取材があった。県・市一体となってミルハスという素晴らしいホールを作り上げ、高校生や一般市民に気軽に活用され、愛着が持たれている成功事例として、本県に実態を取材しに来られたようだ。地域にいと当たり前に感じてしまうが、他県から見るとミルハスのスキームや市民に開かれている土壌は非常に価値が高いものだという気づきがあった。施策の評価では、こうした他者の客観的な視点や良い面を見つけていくことも非常に大切だと感じている。

【若林議長】

とても示唆に富む話だ。

最後に私から全体の感想を簡潔に述べさせていただく。本日の議論を通じて、委員の皆様が「人口減少」という地域の切実な課題を強く意識して議論されていることが非常に印象的であった。全国どこの自治体も人口減少に直面しているが、これほど真正面から、言葉に出して政策議論を行っている秋田は、ある意味「最先端」であると感じる。担い手も観客も減っていく中で文化芸術活動をどう持続させていくかというリアルな視点で捉えたと、このビジョンの在り様も全く別のものに見えてきて、評価においても、それにどう向き合ってきたかを検証していくことの意義を感じた。評価の対象事業が秋田市中心部に集中しているという指摘もあったが、県内の自治体やNPO、文化団体同士が互いに評価し合う「ピアレビュー（相互評価）」という手法もあり、相互のメリットや広域的に評価を把握できる可能性があるということを補足としてお伝えしたい。

長時間にわたり貴重な意見をたくさん出していただき、本当に感謝している。議事は以上とする。

【事務局】

本日は貴重な意見をたくさんいただき、深く感謝申し上げます。

次回の協議会は 2 月頃を予定しており、令和 8 年度事業の進捗状況等について意見をいただきたいと考えているので、引き続きよろしくお願いします。